

高沢一郎物語

柏葉まろみ

シチュエーション1 ワレはゲツクのプロデューサー

上司である編成部長にすすめられ、モニター映像で伊那川遙と長谷部京子の演技をチョイ見したフジテレビ月9ドラマ担当のチーフプロデューサー、高沢一郎は思わず頭を抱え込んで吐き捨てた。「冗談じゃあない、こんな強烈な大根を今度のヒロインに出せてのか？見た人が一人残らずチャンネル変えちまうだろうが・・・」視聴率が1パーセント落ちたというだけで何百万の損害が出るのがこの業界の常だ。そして責任を取らされて降格や減給処分を受けるのは高沢のような現場の製作者である。テレビ局の上層部やキャストを押し付けた芸能事務所では決してない。普通に考えて、とてもじゃないが容認できる条件ではないだろう。だが一介の番組責任者に過ぎぬ高沢は、上からの命令に逆らえる立場には位置していない。大手芸能事務所と末永くおつきあいたいドラマ班上層部は、大根女優たちの起用を高沢らに命じ続けることを永遠にやめることはないだろう。まあ、とにかく連中は絶対にドラマに出さねばならないのだ。今歩いている道は引き返せないし、道を外れて目的地に辿り着くこともできない。それがテレビマン高沢一郎の、自ら選んだ宿命なのである。

高沢はさらに悪い予想を頭に思い浮かべる。相方役の男性俳優の事務所の社長や、彼らの熱狂的なファンからも強烈なお叱りを受けることが予想された。何であんなのをヒロインにした！おまえはドラマをコケさせてうちのタツヤやトッキーをつぶす気か！とかなんとか・・・一見してこれは誰も得をしないキャスティングのように思われるが、だが高沢らにもちゃんと役得はあるのだ。ドラマレベルの低下や視聴者の反発といった多大な損害を押しつけてまでも、あえて大根どもをテレビに出すということは、なんらかの”対価”がなければ現場はとてもじゃないがやってられんよということでもある。ぶっちゃけた話”これやったら、いくらもらえんの？”ということだ。所詮電波販売業者がやっている単なるショーバイに、過度に夢を持つのは禁物であろう、彼らはテレビ画面に映る権利を切り売りしているだけなのだ。看板業者と同様、普通に考えて対価がないわけがない。いい作品を後世に残そうとかいう意志は、所詮二の次三の次の話なのである。

高沢は考えを巡す。時間に余裕はない、とにかく体裁を整えなくてはならない、透明感、新鮮なイメージ・・・何でもいい、我々が彼女を起用しなければならない理由を、無理矢理にでもつくるんだ・・・

シチュエーション2 ライバルの片方がワリを食らう

話はかわって・・・

OとH、その二人のライバルアイドル同志は、いつも片方の娘だけが割を食らっていた。ヤングJやPボーイなどの雑誌で知られ、H末涼子の牙城として知られるS英社。一方のO菜恵側を押すライバル誌のヤングM、写真週刊誌Fデーなどを抱えるK談社。これら二つの出版社はそれぞれの”姫”を担ぎ上げ、彼女達をグラビアや表紙にすることによって部数アップにしのぎを削っていた。O菜はH末を目の上のたんこぶだと思っていたが、一方のH末側にはその感情はなかった。ここ数年来のK談社の旗色は悪い。S英社がH末を表紙やグラビアにしたときの爆発的な売上増加に比べ、O菜を表紙にしたときの雑誌の売れ行きはそれほど伸びなかった。限界知らずのH末とは違い、明らかにO菜はアイドルとしての壁にぶちあたっていたのだ。

はっきり言ってK談社は内心ではO菜を切ってH末に乗り換えたいと思っていた。だが仕事仲間にはH末のデビュー前からO菜を推し続け、その後もH末に対抗心を燃やしつづけている者は多い。結婚式で仲人を務めたほどO菜と深いパイプのある秋元Yなどの人脈を考えれば、O菜を切って己の負けを認めるなどというのは到底出来ない相談である。彼らはO菜”姫”をあくまでもプッシュしつづけ、憎きH末が自分で足元の石にけつまずき、すっ転んで自滅することを願うしかないのである。現にH末はよく”すっ転んだ”。だが転びっぱなしということはなく、いつも何事もなかったかのように、すぐに立ち上がってしまったが・・・

結局彼女はH末を超えられなかったまま芸能界をフェードアウトしてしまった。理由は明らかだ。それはH末と比較しての、芸能界での実績のあまりもの乏しさである。O菜主演の代表作は？有名作品は？ドラマ至上に残るO菜が出演した傑作は？これに答えられる者は恐らく世間に殆どいない。

ずっとH末に邪魔されていていい役がもらえなかったのだ、だからH末やF田たちがこの世からいなくなれば、彼女にも大役が回ってくるのかもしれないんだ。O菜ファンはそう自己弁解したが、なにぶん実際に一回でも大役をもらわないことには負け惜しみととられるだけである。防御率が低くなく負け試合がより多いからといって、金田正一は数回だけ救援に成功したそこいらの補欠投手に劣っているのだろうか？そんなわけがないだろう。それと同じことである。

シチュエーション3 ライバルの片割れが失墜する

そんなこんなで、ある時、そのO菜姫のニャンニャン写真が世間に流出した。O菜サイドは激怒した、相手の男は誰なんだ！

押O学 といって所属事務所はK音である。K音ドラマと揶揄されるBボーイズやS紀末の詩などで傘下の俳優が相手役としてH末と共演することがかなり多い事務所である。直接の共演でなくとも、K音とH末の事務所は月9などのドラマ枠ではキャスティングなどで先発投手のごとくローテーションのリレーがされることが多い。ここまできると互いに共存関係にあるといっても過言ではない。そしてK音は次の月9にも、またもやあのT内豊とH末を共演させる予定でいるらしい。

これはH末派の陰謀に違いない！！K音はH末と連合して、使い捨てできる無名の下っ端である自分の子飼いのタレントをスケコマシに使い、O菜に接近して陥れた！H末はドラマでのヒロイン役の独占を狙っている！クソッ！あいつらがこんな卑怯なことをやらかすとは！「目には目を、歯には歯をだ！」O菜サイドは決意した。

場所は再びかわるが・・・

そのころ、流出したニャンニャン写真が載っている雑誌を読みながら、大手芸能事務所の社長であるS氏が側近にある言葉をつぶやいた。側近は出て行き、しばらくして一人の青年が入ってきた。そして彼はその青年に、これみよがしに今読んでいたゴシップ記事を見せた。そして言った。「君がやることはわかっているな。俺は多くは言わんよ」

青年ははっきりと返答した「もちろん、わかっています」

「やられたら同じことをやり返す、これがこの業界のセオリーなんだ。そうしないと誰も生き残れない。O菜君も君も、そして私もだ。何も私は好きこのんでこんなことをずっとやってきた訳じゃないんだ。こうしないと、ここから退場させられるんだよ。仕事を続けていくことが二度とできなくなる。こんな虚しくて無駄な 思いをするのは誰だって嫌だろう」

「そうですね」

「で、誰を標的にするのは、こういったことに慣れているきみのことだから、うすうすわかっているだろうと思うんだが・・・」 「勿論、それもわかっています」

K野映画などで有名な俳優である彼、K子賢はそう答えた。

”しかし、タダでトップアイドルの体をもてあそべるとはいえ、エライことを引き受けちまったもんだ・・・ソファーに寝転んで”昨日S氏に言われたことを頭の中で反芻しながら、彼、K子Kはこれからの筋書きを綿密に思い描いていた。”くつつくと思いきや引き離す・・・これがスケコマシの基本だ。

俺とあいつが付き合っただけの間柄となる。だが暫くした後そこに自分の存在を脅かすライバルの芸能人の女が現れる。俺もその女にはまんざらではないって素振りを見せる。その泥棒猫のルックスや芸能界の実力はどうみてもあいつ側からみて格下であるというところがミソだ。ああいったプライドの高い女は、相手の男が自分より劣る女になびきだすと、男の心を再び自分のほうに向けさせようとして、仕舞には男の言うことを何でもきくようになる。そうすれば主導権はこっちのもの、ここまではよし、っと・・・”

彼はさらにプロットを練り上げる。「あのS社長はアテ馬としての泥棒猫も既に手はずを整えてくれている。自分がスケコマシの汚名を着せられても、マスコミを動かして、自分をかばってくれる記事を書かせるとまで言ってくれているのだ。改めて考えてみるとすごい人だよ”あの人”は・・・自分を非難する記事は圧力で抑えてしまって表には出ない、メディアで批判されるのはあいつのみ、そして芸能界で自分は失墜せず、失墜するのもあいつのみ。そしてSさんは、自分の今後の仕事すらちゃんと保証してくれている。今後の自分の身の置き所に関しては全く心配は無い」

「ハハハ！！なんておいしい商売なんだ！芸能界ってのは！」彼は思わず叫んだ。

「ホステスだったら何百万も貢がなければならない綺麗な芸能人と好き勝手に遊べて、しかもそれを止めるものも咎める者もない。”あの人”が怖くてマスコミは自分には手は出せず、当然自分の仕事はまったく減らない。ライバル失墜をたくらむ事務所からは逆によくやったとお褒めの言葉をいただけるかもしれない・・・マジでいいこと尽くしじゃあないか！世の中、こんなうまい話が本当に転がっているとはな。これじゃ誰だって芸能界をやめられなくなるわ。たとえどんな手を使ってでもここに残りたくなる。まさに”あの人”の言っていた通りだよ」

ところで・・・”あの人”やK子のいう”あいつ”って誰？言わずともお分かりだろう。

シチュエーション6 イリヨクは海外には通用せず

この計画はK・Kの心配をよそにおおかたの成功を見たことは、いまさら説明の必要は無いだろうと思う。その後のいきさつは読者のご存知のとおりである。

女性の体内に薬物を挿入して前後不覚にさせ、女性を自分の意のままにして、いわば性的玩具のようなものにするといったよく見聞きするシチュエーションは、エロ漫画の定番ネタであることからわかるとおり、男性読者側のそうありたいという願望、そしてその需要が世間にどれだけあるかということのみが問題であった。それが本当のことなのかどうかなど受け手にはどうでもよいことであったのだ。いわばあのとき、マスコミ記事を見たすべての人間が妄想に浸っていたわけである。いわば”表だったエロゲーやポルノ小説”というべきものだったのかもしれない。

しかしこれだけのあからさまなマスコミ操作が、日本の大衆から目立った批判も無く公然と行われたということは、海外に日本メディアの異常さを存分にさらけ出すことになり、以降、海外の人達は日本発の情報を余り信用しなくなった。よってバーニングの強力なマスコミパワーは海外では通用しなくなっていったのである。その証拠に韓国などのアジア諸国ではあれ以来かえってH末の人氣が上昇しているのである。ちょうど少し前に放映されたSummer Snowなどの佳作ドラマが広まる時期であったという理由もあるが、なにぶん彼らはドラマの質しか興味をもっておらず、バッシングが効かないのである。

そんなくだらない日本発の情報など現地メディアだっていちいち母国語に翻訳する気にもならないだろうし、結果、一般市民は読みもしないだろうし、またたとえ手間かけて翻訳してメディアに流したとしても興味は持ってくれないだろう。例外は台湾くらいなものだ。とにかくこんなバッシング騒動はたとえ大金かけて行われようが海外では意味のないことであった。証拠にH末が叩かれて第一線を退いた以後に彼女と入れ違いとばかりにさっそうと登場した”癒し系”とやらの一連の女優達などは、海外メディアでは殆ど黙殺をされた。満足させるに足るドラマコンテンツなど彼女たちは何一つ持っていなかったためである。バーニングの海外での威力が衰えたというのではなく、そんなものは最初からなかったのかも知れない。

以後の文章は未校正です。元の文章こちら。

<http://d.hatena.ne.jp/aosa/20040315#1088416918>